

中世の限界

伊藤 康安

一

我が中世文学を長い間あつかい、それについていろ／＼考えているうちに、中世の限界さかいめということが疑問になつて来た。これについては諸説があるようだが、自分は自分なりの考えを出して見ようと思つて、あれこれ調べて見ている中に、二人の天皇が私の心の中に大きく浮びあがつて来た。後冷泉と後三条とである。この両帝は兄弟で、後朱雀の皇子であるが、後冷泉は道長の四女嬉子の腹で、後三条は三条院の皇女禎子のかみこ内親王の所生である。よつて、後三条は、母系に於いて藤原氏と血のつながりがない。摂関家の女の所生が天皇になるといふ良房以来の、更に的確には貞信公以来の伝統がこゝに破れたのである。良房に始まる人臣の摂政、基経に基をひらく関白制度、いわゆる摂関家なるものは、貞信公忠平以来権勢をつのり、御堂関白道長に至つて専横の極に達した。その摂関政治に終止符をうったのが後三条天皇である。

主上(後三条)逆鱗ニオヨビテ仰ラレテ云ク、関白関白摂政摂政ノオモクオソロシキ事ハ、帝ノ外祖ナドナルコソアレ。ワレハナキトモオモハヌゾトテ、御ヒゲヲイカラシテ、事ノ外ニ御ムヅカリアリケレバ、殿(関白教通)座ヲタチテ、イデサセ給トテ、大声ヲ

ハナチテノ給ハク、藤氏ノ上達部ミナマカリ立テ、春日大明神ノ御威ハ今日ウセハテヌルゾ、トイヒカケテ出給ケレバ、氏ノ公卿マコトニモ一人モノコラズ皆座ヲタチテ、殿ノ御トモニ出ケレバ、事ガラオビタダシクゾアリケル。(続古事談、第一)

これが、摂関政治の幕切れの一場面である。摂関が帝の外祖父である場合こそ、権威もあり、帝にとって目の上の瘤でもあるが、関白が赤の他人で、たゞの臣下であって見れば、おそろしくも何ともないのである。そこで後三条は大鉦をふるって思い切った改革をやった。藤原氏が濫設した荘園の整理、荘園新設の禁止、摂関政治の巨害であった売官制度や、不在国守の任期延長などの悪政廃止などがそれである。後三条のこの英断は、摂関家及び藤氏一族にとって経済的打撃であり、権威の失墜であるから、時の関白教通は強硬に抗議した。そこで主上逆鱗に及んだのである。関白も最後の腹を定めて、藤氏の公卿を引具して宮中から退去した。「春日大明神の御威は今日失せてぬるぞ」——これは摂関政治断末魔の叫びである。関白氏の長者は、藤原一門の総領であると共に、春日大明神の権化ということになっている。故に、春日大明神の威光の失せたということは、摂関政治の滅亡を意味する。そして、それに代って出現したのが院政である。

サテ世ノ末ノ大ナルカハリメハ、後三条院世ノスエニ、ヒトヘニ臣下ノマ、ニテ、撰録臣世ヲトリテ内(主上)ハ幽玄ノサカイニテオハシマサム事、末代ニ人ノ心ハラダシカラズ。脱離ノ後、太上天皇トテ政ヲセヌナラヒハ、アシキ事ナリトラボシメシテ、カタノノ道理サシモヤラボシメシケン。(愚管抄、巻四)

摂関政治から院政への推移は、「大ナル変リ目」であった。後三条院がこの大変革を思い立った理由は、天皇を幽玄の境に置いてロボットとなし、臣下たる関白が政権を握るということは、昔はともかく、今日に於いては納得出来ぬ政治である。故に、撰録の臣から政権を取上げ、太上天皇が院中に於いて政治を執るようにせねばならぬと

考えられたからである。

かくて、後三条院は、延久四年十二月八日脱屣あり、全廿九日、皇太子（白河）に位を譲り、太上天皇となって院政を始められた。しかし、翌五年五月、御年四十にして崩御になったので、完全なる院政の実施は白河によって行われることになるが、とにかく、摂関政治に終止符をうち、院政を創始したのは後三条である。而もその院政の実態を調べて見ると、そこにすでに中世的な要素が含まれ、武家・戦乱の中世時代を起す要因が多く見出されるのである。

二

摂関時代と院政時代との著しい相違は、第一に、後宮閥門の素質が低く卑しくなつて来たことである。摂関時代に於いては、皇女か、摂関大臣家の女でなくては女御・后になれなかった。やんごとなき際でなければすぐれて時めいても、更衣・御息所で終らねばならなかった。やんごとなき際でなくして時めくと、桐壺の場合のように、それが問題となり、嫉視の的となった。しかるに、院政時代になると、摂関家が、いわゆる揚名閥白で実力がなくなつたために、その女を入内させることが出来ず、稀れにその機会を掴んでも結果は面白くなかつた。后妃の種姓の低下ということは、先ず後三条の後宮に始まる。大納言藤原能信の女、実は中納言公成の女茂子は、後三条の事実上の皇后で、白河院を生んで、贈皇太后となった。能信は高松殿腹ではあるが道長の四男で、後三条擁立の功勞者であるので、その養女茂子を納れて妃としたのである。後三条は立坊のそも／＼から、藤氏所生でないという理由で、猛烈な反対があつたのを、能信が押切つて東宮にした。故に、壺切の剣は、叔父宮小一条院の時と同じよう

に、東宮の手元には渡らなかつたのである。藤氏の命取りの後三条を人もあろうに道長の息子が東宮に押立てるとは皮肉な廻り合せである。とにかく、能信の功は報いられて、大納言の女が皇太后になったのである。これは摂関時代には見られぬ現象である。次に、白河院の皇后賢子はどうかというと、これは関白師実の養女となつてゐるが、実は右大臣源頼房の女である。皇統源氏の出で、種姓はよいが、藤原氏の出ではない。それをことさらに、関白の養女に仕立てゝ入内させたのは、後三条の摂関家に対する政略であつて、宇治に隠栖してゐた頼通が、うれし涙にむせんだというのも、さこそと察せられる。院政以来後宮の素質が低下し、藤原氏の女御・后独占制が破れたことを榮華物語は書いてゐる。

御息所・更衣などみな中将少將のむすめ、受領のもみなまいりけるを、このちかき世には、おぼろげの人はまいり給はぬものにならひたるに、いとあさましきなり。入道殿(道長)に后御門はおはしますものと思ふに云云(卷三十八、松のしづえ、延久三年の條)とあるによつて明らかである。

院政は白河院の時に本格的になつた。院政が確立すると、摂関家は閉塞の一途を辿つた。

(白河院) 国のまつりごと、廿一の御年よりみづからしらせ給ひて、位におはしますこと十四年なりしに、三十四にて位おろさせ給ひて後、七十七までおはしゝかば、五十六年国のまつりことせさせ給へりき。(中略) さき(後三条)のなごりにて、一の人のがまゝおこなひ給ふもおはせねば、わかくより世をしらせ給ひて、院の後には、堀河院・鳥羽院・讃岐院(崇徳)の、みこ、うまご、ひこご、うちつづき三代の帝の御世、法皇(白河)の御まつりことのまゝなり。かく久しく世を知らせ給ふことは、昔もならひなき御有様なり。後二条のおとど(師通)こそ、おり位の帝の門に車立つるやうやはあるなどのたまひける。それにくれたまひて後は少しもいきなど立つる人やは侍りし。(今頃、卷二)

こゝに、院政の生態と、摂関家殞落の状態とが、はっきり出ている。後二条関白師通は頼通の孫で、堀河帝承德三年六月に歿したのであるから、その頃、摂関家は全く無力化したものと見える。

さて、白河院の中宮賢子は、堀河を生み（第一皇子は夭折）皇女二人を生んで応徳元年廿八で亡くなったが、その後、白河院は、院中の女房白川殿というを寵愛した。

白河院の御世に后・御息所などかくれさせ給ひて、さるかたぐもおはせざりしに、白川殿ときこえ給ふ人おはしましき。

その人、待賢門院（璋子）をば養ひ奉り給ひて、院も御むすめとてもてなしきこえさせ給ひし也。その白川殿あさましきすくせおはしける人なるべし。宣旨などは下されざりけれども、世の人祇園の女御とぞ申すめりし。もとよりかの院（白河）のうちの局わたりにおはしけるを、はつかに御覧じつけさせ給ひて、三千の寵愛ひとりのみ也けり。ただ人におはせざるべし。（今鏡、巻四）

平家物語「祇園の女御」の段には、東山の麓、祇園のほとりに住んでいた女房で、白河院が常に通って行ったとしてあるが、いづれにしても素姓の卑しい女であったことは明かで、これが院をそゝのかし、いろ／＼政治に喩を入れた一の例は、大納言藤原公実の女、璋子を自分の養女として院中に養ひ、白河院もまた猶子としてこれ待遇し、後に鳥羽帝の女御として入内させた。待賢門院である。而も、古事談の記すところによると、白河院は密に璋子を愛して妊娠せしめ、そのまゝ鳥羽の後とした。そして生れたのが崇徳であるという。崇徳は鳥羽にとって表面は子であるが、実は叔父にあたるので、叔父子と呼んだという。これを事実とすると、白河・鳥羽——鳥羽・崇徳の間に不和不快の存在したことは想像に難くない。従って又、鳥羽と待賢門院の間も円満ではなかったらしく、やがて中納言藤原長実の女得子を寵幸するに至った。美福門院である。美福門院は皇子近衛を生むと、鳥羽に迫って崇徳

を退位せしめ、近衛を帝位に即けた。近衛が若くして崩ずると、又その指金で、崇徳の同腹の弟、後白河を即位せしめた。崇徳の後は、関白忠通の女聖子、即ち皇嘉門院で、めづらしく関白家出身の後であったが、崇徳は兵衛佐ノ局と呼ぶ氏素姓も分らぬ女房を愛してその腹に重仁親王を生ませた。崇徳とその母待賢門院とは、近衛のあとに重仁を立てたい気持であったのを、美福門院に先手を打たれてしまった。そこで待賢門院と美福門院の仲が悪くなり、先妻（こなみ）が後妻（うよなみ）を呪咄するといふ騒ぎまであって、主上（後白河）上皇（崇徳）の不和確執は募るばかり。遂に保元の乱とはなったのである。院政による後宮の低下紊乱は、いわゆる女人入眼という牝雞政治を馴致し、中世の世相たる戦乱の世を惹き起すに至ったのである。

三

摂関時代と院政時代との相違の第二は、院の近臣と稱して官位の低い者が政治に携るようになったことである。そのことを愚管抄に、「白河院ノ後、別ニ近臣トテ、白河院ニハ初ハ俊明、末ニハ顯隆・顯頼ナドイフモノイデキテ、本体ノ摂録ノ臣、カ、ナ、シ、ク、ヲ、サ、レ、テ云々」といふ、また、「世ヲシロシメス君ト摂録ノ臣トヒシト一ツ御心ニテ、チガウ事ノ返々侍ルマジキヲ、別ニ院ノ近臣トイフモノハ、男女、ニツキテイデキヌレバ、ソレガ中ニイテ、イカニモノコノ王臣ノ中アシク申ナリ」といふ、また「末ザマニハ王臣中アシキヤウニノミ、近臣愚者モテナシ、ハ、世ハ、カ、タ、ブ、キ、ウ、ス、ル、ナリ。」（愚管抄、卷七）といつて、院の近臣の弊を説いている。朝廷には形のごとく摂関大臣は居たが、実権はなく、実権は院の近臣の手にあつた。白河院の近臣藤原顯季は修理ノ大夫、葉室顯頼は五位ノ藏人、その父顯隆は中納言で、いづれも微官である。而も顯隆は、夜の関白と綽名されるほどの実権を握っていた。鳥羽

の院政は僅か二十七年であつたが、保元の乱の誘因となつた政局だけに、近臣關係も複雑なものであつた。一言にして云えば、美福門院を中心とする關閥政治で、堀川大納言師賴は、得子の叔父という關係で院・内に重用せられ、近衛院立太子の時は東宮大夫として、鳥羽・美福二人の掌中の玉を育てる大役に當つた。又少納言藤原通憲（入道信西）も、鳥羽院の乳人紀ノ二位の夫という關係で、院の近臣に列して万機の諮問に預つた。又大式の局の夫である平忠盛は、妻が白川殿に仕えた關係で、待賢門院の知遇を得、重仁親王の傳めととなつて院中に出入し、その息子の清盛は、高平太と卑稱されつゝ、常に中納言家成卿の家に入り侵つていたが、その家成は鳥羽院の第一の寵臣であつた。後白河の院政は、保元三年から建久三年まで、二条・六条・高倉・安德・後鳥羽の五朝、三十五年間それに在位の三ヶ年を加えて三十八年の久しきに亘るが、その近臣には少納言入道信西・右衛門督信賴・新大納言成親・西光法師などの面々が居つて、それ／＼保元平治の乱や鹿ヶ谷の事などに關係して明動暗躍した。かように官位の低いものが権力を握るようになったのが中世の姿で、後には下剋上の世相を馴致するに至つた。

地方武人はどうかという、平家は国香・貞盛父子の時、將門の乱を平定して実戦の經驗をつみ、源氏は後九年、後三年の役に賴義、義家が出征して武勳を建て、武家の棟梁としての声望、平家を凌ぐものがあつた。義家は智謀の將ではあつたが、一介の武弁に過ぎず、忠盛は西国にあって富を蓄積し、その富力を以て鳥羽院のために得長寿院を造営し、その勲賞によつて昇殿を許され、殿上人となつた。院政は遂に地下の武人を殿上人に押し上げたのである。保元平治の乱は武人が天下を取る契機となつた。中世の様相はすでに院政に見られるのである。

四

中世文学の限界について、その契点の第一を後三条天皇に置き、第二を後冷泉天皇に置いて見ようと思う。扶桑略記によると、後冷泉天皇、永承七年壬辰正月廿六日の条に、「今年始入末法」と明記されているが、この末法思想こそ中世の宗教・文学・思想に大きな影響をあたえているのである。この思想は賢劫経・大集月藏経等に説かれている仏教時代観で、釈迦の入滅を起点として正法・像法・末法の三時に分ち、正法五百年・像法五百年、計一千年以後を末法とする説と、正法五百年・像法一千年、計一千五百年以後を末法とする説と、正法一千年・像法一千年、計二千百年以後を末法とする説と大体三説あって、扶桑略記は滅後二千年説によっているのである。一千年末法説は中国に於いて行われ、隋の行信、唐の道緯・善導等によって弥陀信仰・念仏行が唱導され、一千五百年末法説は、我国に於いて伝教の末法燈明記に採用され、恵心の往生要集成立の機縁となった。扶桑略記の二千年末法説は、末法燈明記に、釈迦の入滅を周穆王五十三年とし、延暦二十年に至るまで一千七百五十年とするのに依ったもので、この年代に従うと、永承七年は丁度滅後二千年となる。燈明記の説も、法上法師という人が周異記に依って述べた説に従っているもので、歴史的に確かな説という訳ではないが、思想的には強く信じられていたのである。

正法は戒定慧の三学、正しく行われて、解脱堅固の時代、像法は定慧のみ像ばかり残って、禪定堅固・多聞堅固の時代、末法は三学すべて廢れて仏法滅尽し、造寺堅固・鬪諍堅固の時代とされている（大集月藏経）。この仏教の時代觀殊に末法思想は、中世の世相と符節を合するものがあつた。南都・北嶺の争、山門・寺門の争等、寺家の鬪争について、扶桑略記・百鍊抄は、一々詳細に記している。一例を挙げると、永保元年九月の条に、

九日。叡山僧徒数千人、或着甲冑、引率战士、行向三井寺、焼亡寺塔僧房等。仏像経卷悉為燼。（中略）開闢以来世未有如此之灾禍一矣。（中略）門人上下各皆逃隱山林、或含悲入黄泉、或懷愁仰蒼天。今年入末法、歴三十年一矣。（扶桑略

記、第三十

寺家の鬭争を先驅として朝家・公家・武家等も不和確執の渦中に卷込まれ、保元・平治・源平争乱を惹起し、鬭諍堅固の末法の世相を実現するに至った。愚管抄は、「マコトニハ末代悪世武士ガ世ニナリハテハ、末法ニモイリニタレバ」云々といい、又、「保元以後ノコトハミナ乱世ニテ侍レバ、ワロキコトノミニテアランズルヲハマカリテ、人モ申シヲカヌニヤ」といふ、また「天下日本国ノ運ノツキハテハ、大乱ノイデキテ、ヒシト武者ノ世ニナリシナリ。」といつて、末法悪世觀を強調している。蓋し、愚管抄の著者慈円は、忠通の子で関白家の出身であるから、武家の擡頭に反感を持ったのも当然といふべきであらう。水鏡は、この末法悪世觀を更に押し進めて、「すべて三界は厭うべき事なりとぞおぼすべき」(序文)と、否定的人生觀を主張し、厭世思想を鼓吹するのである。そして、その結果は、発心遁世者、世捨人を簇出せしめ、多くの遁世文学、草庵文学を産むに至つたのである。また、そこには末法に相応する宗教も説かれた。

末法濁乱の機には、称名を以てすぐれたりす。志を九品くよにわかち、行を六字につゞめて、いかなる愚痴ぐし闇鈍あんどんの者も唱ふるに便あり(平家物語、卷十)

という法然の教化がそれであつた。時は末法濁乱、人は愚痴闇鈍である。三史五經の道々しき學問はすたれ、止觀天台のおごそかな教理は用を為さなくなつた。愚管抄は、當時の學問の低下を歎いて、

此末代ザマノ事ヲ知ルニ、文簿ニタヅサハレル人ハ貴キモ卑モ僧ニモ俗ニモ有難ク、(中略)男ハ紀伝・明経ノ文多カレドモ知ラザルガ如ク也。僧ハ經論章疏アレドモ學スル人少ナシ。日本紀以下律令ハ我國ノ事ナレドモ、今スコシ読解ク人アリ難シ。

總ジテ僧モ俗モ今ノ世ヲ見ルニ、智解ノムゲニウセテ學問トイフコトヲセヌ也。スベテサスガニ内典外典ノ文籍ハ一切經ナド

モキラ／＼トアムメレド学スル人モナシ。(愚管抄、巻七)

この学問の低下は、漢文を書き下した和漢混淆文の流行となり、教訓を本位とした説話文学が作られるようになり、中世文学一般が物教え的な傾向を持つようになった。また、末法澆季・末代惡世などの語が随所に繰返されて、時代に対する忌避的な感情があらわれ、或はまた清盛の横暴に対して、「これも世末になりて王法の尽きぬる故なり」(平家)とか、「是も末代に及んで王法の尽きぬるにや、逆も由なし」(盛衰記)などという絶望的な歎声が発せられたのも、末法思想から来る否定的人生觀の結果であらう。仏法王法は互角と考へられていたから、仏法の滅尽は王法の滅亡を意味することになるであらう。平家物語は、山門滅亡の段に於いて、堂衆学匠の争いによって叡山自ら滅びてゆくことを写し、

谷々の講演磨滅して、堂塔の行法も退轉す。修学の窓を閉ぢ、座禪の床を空しうせり。四教五時の花もにははず三諦即是の秋の月も曇れり。(平家、巻二)

と名句を連ね、顯密二教、教觀二門の荒廃を語っている、又、三井寺焼亡・奈良炎上によって、仏教教団は悉く亡んで行つた。まことに仏法滅尽・白法隱没の末法の姿である。しかし、仏法の亡びるということは、形の上のそれではなく、実は戒律の滅びることであつた。破戒無慚・放逸無慚は當時の僧の常習であつた。末法は戒定慧三学の亡びる時と經文に示されている。そこで、戒律を棄て、難行を避け、他力易行の念仏の法によって在家仏教を興えようとする一派が生じた。法然・親鸞の浄土門がそれである。南都・北嶺の滅びたあとに、末法の時代に相應した新興仏教が生れたのである。ところがこゝに、末法で仏法が滅びるというのなら、今こそ仏法を興隆しなくてはならぬ。戒律が亡びるというのなら、今こそ戒律を復興しなくてはならぬという運動が起つて來た。その急先鋒となつ

たのは、泉涌寺俊仍で、次に搦尾の明恵、笠置の貞慶、西大寺睿学建仁寺榮西等であった。

五

俊仍は戒律復興の目的を以て建久十年、(南宋慶元五年)入宋し、滯宋十二年にして建曆元年帰朝したが、その時、律宗經典三百二十七卷・天台章疏七百十六卷・華嚴章疏百七十五卷・儒書二百五十六卷・雜書四百六十二卷を將來した。(不可棄法師傳、元亨釈書)俊仍入宋の慶元五年は、朱子の歿する前年に当り、朱子の新註の四書が盛に行われていた折なので、俊仍將來の儒書の中に朱子の新註のあったことは勿論、またその説くところの理氣・心性の學を學んで來たことも当然といわねばならぬ。俊仍は京・鎌倉の各地に説戒・授戒を行うと共に、嘉祿元年には泉涌寺の講堂に於いて四書の講義を行った。法相の貞慶・天台の慈円・關白道家・徳大寺公継等の高僧名流が多く講席に列したというから、その席上、恐らく朱子學の解説も行われた事であろう。因って俊仍を以て北京律の祖とすると共に我國朱子學の初伝とするのである。

末法思想の反動は、戒律を復興せしめると共に、新儒學を伝來して、中世の文化に貢獻することになった。また末法思想の反動は、戒律復興のみに止らず、ひろく仏法興隆の氣運をも誘發した。教主たる釈迦への信仰、佛教の發祥地たる印度への憧憬が強くなったのは、その為めである。和国の教主として聖徳太子も信仰された。印度憧憬の現われとしては、平家物語や、水鏡や、梁塵秘抄などに、祇園精舎が採上げられ、印度の仏跡參拜が企てられ、中国の靈場巡礼が流行した事によって解る。杳然・寂昭・成尋に次いで、榮西が入宋したのは仁安三年で、天台山・育王山等を巡拜した。これは成尋の「參天台五台山記」に負うところがあったであろう。榮西の第二次入宋は

文治三年で、この時は印度の仏跡参拝が目的であつた。しかし、事情あつて入竺は遂げられず、已むなく天台山に止まり、万年寺虚庵に禪を学び、臨済宗黄龍派の禪を伝えて建久二年に帰朝した。これを禪の第一伝とする。梶尾の明恵も熱心な釈迦信仰者で、印度渡航を企てた一人であつた。

元久二年春比、年来の本意たる間、渡天竺の事思立給けり。同心の同行五六人也。志を一にして既に其営みに及ぶ。又大唐の長安城より中天竺王舍城に至るまでの路次の里数に付て、先達の旧記を尋ね、此を検べ注し給ふ。今に上人の御経袋の中にあり。然間、評定し營で殆んど衣裳の立出に及ぶ。然るに、上人重病を煩ひ給へり。(梶尾明恵上人傳記)

そういうわけで、実行は出来なかつたが、計画だけは周到なものであつた。明恵は華嚴の学匠であるが、榮西について禪を学び熱心な坐禪行者となつた。鶴岡の社僧行勇・上州世良田の榮朝・三井の公胤等、皆榮西の禪に帰し、將軍頼家は京都東山に建仁寺を建て、榮西を開山とした。年号寺は国立寺院たることを証するもので、正に比叡山延暦寺に対抗したものである。禪による仏教興隆の意図がこゝに見られるのである。新興宗教の禪宗に対する叡山の圧迫はひどく、それに反撥して榮西の著した興禪護国論は、滅びゆく旧仏教への挽歌であると共に、仏教改革の雄たけびであつた。かくて仏教興隆に志すもの、先ず禪に志し、禪に志すもの、概ね海を渡つて宋に入り、又元に遊んだ。その禪僧の主なるもの十一名である。当時中国は、宋末元初の戦乱時代であつて難を避け又は招聘をうけて来朝した宋元の禪僧十三名、これを合せて二十四流の禪という。これら彼我の禪僧の往来によつて宋元の文化が輸入されたことは著しいもので、絵画・建築・陶器・飲食等多方面に亘っているが、その代表的なものは、宋学即ち朱子学の伝来であつた。宋学の創始者周濂溪を初め、邵康節・程明道・程伊川等の大儒は、当時流行の禪を學び、禪意を採つて宋学を構成し、禪の宗匠しゅうしやうはまた宋儒の表現を用いて説禪に供し、儒仏一致乃至老儒仏三道一

致の思想が、中国思想界を風靡していた。

六

俊仍帰朝の建暦元年を隔る二十四年後の嘉祥元年に、圓爾（聖一國師）は入宋し、当時中国禪界の三傑といわれた北磻・痴絶・無準等、に歴参し、径山万寿寺無準の法を嗣いで仁治二年帰朝した。その時、將來した書籍は、彼の記すところの「普門院経論章疏語録儒書等目錄」によると、三百三十九部・一千余卷といわれ、その中儒書三十部は殆んど朱子の新註であつたといわれる。因つて円爾を以て朱子学の第二伝とする。円爾の師事した北磻・痴絶・無準の三僧は、黒衣の儒者といわれたほど程朱の学に造詣の深かつた人で、その薰陶を受けた円爾が儒仏一致思想の持主であつたことは云うまでもなく、正嘉元年六月、彼が鎌倉に於いて時頼のために「大明録」を講じたことは、それを証するに足るのである。この録は、宋の圭堂居士の著であつて、程明道の説を以て禪を解釈したものであるからである。元亨釈書によると、この書は、円爾が帰朝の際、師の無準から「宗門大事備_三此書、子_三歸_三本土_三」以_レ是爲_レ準」と云つて贈られたものである。以て、この師弟の宋学に對する関心のほどを知ることが出来るであらう。九条閑白道家は、その別業を革めて寺とし、東福寺と名づけ、円爾を開山とした。東福寺の名は東大寺と興福寺とを一字ずつとつたもので、禪による仏教統一の理想を暗示しているのである。後嵯峨天皇は円爾を召して禪法を聞かれた。朝廷説禪の初めである。のち聖一國師と諡せられた。

蘭溪は、中国禪僧として來朝した最初の人である。円爾と同じく、北磻・痴絶・無準に師事した儒仏一致の思想家である。執権北条時頼はこれを鎌倉に迎え、宋国五山の第一、径山万寿寺の規模を写して建長寺を建て、禪専門

の道場とした。建仁も東福も表面は禪寺であったが、叡山を憚って實際は台密禪三宗兼学であった。時頼は天台・真言の公家仏教に対し、武家の仏教を確立するために禪宗を支持し、蘭溪に師事して自己心性を究明すると共に、政治の要道を諮問した。

政者正也。所以正文物也。文物不正則世不治。故古之聖賢先正人文而以治國矣。為正字一止也。是以不究一、不能知正也。公要知為政之禪。請必究一去。一者万物之根本。諸學之本源也。公究之識得一一其応用無量。何言東土之政。可以治天地也。（大覚禪師語錄）

政は正である。人心を正しくし、制度文物を正しくするが治国の要道であるという。これは仏者の説と云うよりは、儒者の口吻ではないか。「正の字たる一止る也」——字解を以て説をなすのも又儒者的である。正という字は一止と書く。故に一を究明しなければ正は解らない。一は万物の根本であるから、一が解れば凡てが解って応用自在だ。日本一国どころか世界を治めることが出来るといふ。では、その一とは何かというと、蘭溪に従えば人である。人という字を見ると、一、相支へて倒れず、傾かず、離れず、仁・正・和そのものである。故に人字の徳を以て上下に示し、互にその徳を守れば天下よく治り、法律命令の必要はなくなる、というのである。こゝに正という理念が打出されているが、これが、中世文学を貫く理念で忠孝・仁義・和敬等あらゆる道義的なものが、正に統一されている。平安文学の美・貴・優の理念とは異なるのである。中世文学の批判的精神はこの正の理念に基くものといつてよい。この「正」が明恵の場合には「無欲」に置き換えられる。明恵が泰時を諭した語に

古人曰、未_レ有_二其身正影曲_一。其政正国乱と云々。この正といふは無欲也。又云、君子居其室言出。善則千里外皆応_レ之と云々。此善といふも無欲也。只大守（泰時）一人、実に無欲に成すまじ給はゞ、其徳にいふせられ、其用に恥て、国家の万民自然に欲

心うすく成べく、小欲知足ならば、天下やすく治るべし。(洪柿)

泰時は無欲を實踐し、時頼は正を實行して善政を行い、その余徳数代に及んで武士道の根本精神を養ったことは、親房も指摘している。

大かた泰時心正しく、政すなはにして、人をはぐくみ、物におごらず、公家の御事を重くし、本所の煩ひをとどめしかば、風の前に塵なくして、天下即ちしづまりき。かくて年代をかさねしこと、偏に泰時が力とぞ申し伝ふめる。(神皇正統記)

寛元四年、蘭溪が渡来して以来、兀庵・大休・無学(仏光国師・円覚寺祖)等の諸禪師が相次いで来朝し、老儒仏三道一致思想を説いたが、正安元年に至って元の国から、一山(寧一山)という僧がやって来た。これは元の世祖の命をうけて、日本の国情偵察に来たものであるから、執権貞時はこれを捕えて伊豆修善寺に幽閉したが、人物が傑れ、博識多才なので、許して建長・円覚等の官寺に住せしめ、後、京都南禪寺に住して後宇多上皇の帰依を受け、一山国師として朝野に名声を博した。元亨釈書には一山を伝して、

「教乘諸部、儒道百家、稗官小説、郷談俚語、出入泛濫、輒累數幅」(釋黄 卷八)

と記し、日本文化に貢献したことを讃している。これが宋学伝来の第三である。一山の弟子には虎関あり、雪村(友梅)あり、夢窓あり、虎関は一山に激発されて元亨釈書を著し、雪村は滞元四十余年の記録を持つ詩宗であり、夢窓は七朝国師として南北朝の我が禪宗の黄金時代に活躍した大禪伯であり、其の門下に春屋・義堂・絶海の三傑を出して五山文学に蘭菊の美を競わしめた。因って一山をわが五山文学の祖とするのである。五山禪門の朱子学は、京都の博士家に入り、朝廷にも入り、老・儒・仏三道一致思想は神儒仏一致の思想にまで発展し、国体觀念・愛国精神の昂揚となり、これが関東打倒の運動となって北条氏を亡し、建武中興が一先完遂した。この思想的指導

者となつたのは、当時随一の朱子学者玄恵法印で、北条氏討伐に活躍した後醍醐帝側近の公家だちは多くその門下であつた。

仏法滅尽の末法は、南都・北嶺の旧仏教を亡し、戒律放棄の在家仏教、悪人救済の庶民仏教たる念仏の法門を弘めたと共に、その反動として起つた戒律復興、仏教興隆の動きは、禪宗の伝来を促し、それに伴う朱子学の渡来は、學問低下の中世に學問の息吹を吹き返させ、新しき指導階級となつた武家は、新しき指導精神を禪に求め、無心無欲にして而も王者の如き氣宇を養ひ、清廉枯淡にして而も活潑々地の活動を為し得る修養道を完成するに至つた。

中世は實に、後三条院の院政に源を發し、同時にまた後冷泉院以後の末法思想の影響のもとに展開せられているのであるから、この兩帝のところに上代と中世の限界きがいの一線を引くのが至当であると考える。中世の終末は、足利氏の滅亡した天正元年としておく。